

# 國學院大學學術情報リポジトリ

『国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開  
国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書  
』の刊行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000592">https://doi.org/10.57529/0002000592</a>

## 『国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書』の刊行

本書は、2020年2月8日（土）に開催された國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催・国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」における各発表及び討議を、報告書としてまとめたものである。

開催概要は既に本誌第13号・トピック1（8～10頁）にて紹介されているため、ここでは報告書の構成に焦点を絞ってお示しする。

URL：<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ijcc-publications/forum-grcea2019-2>

【基調報告】9～13頁

「本フォーラムの主催者の問題意識と学術的背景」松本久史、本学教授

【報告】15～21頁

「国学における言語学の意義」ジョン・R・ベンテリー、北イリノイ大学人文学部教授（米国）

【報告】23～35頁

「国学、実学、朝鮮学—学術運動としての韓国「国学」研究の動向と展望」裴寛紋、KAIST（Korea Advanced Institute of Science and Technology）人文社会科学部招聘教授（韓国）

【報告】37～55頁

「会沢正志斎における「天祖」の位置」蔣建偉、浙江師範大学講師（中国）

【報告】57～70頁

「只野真葛（1763-1825）：近世の学者ネットワークとジェンダー」ベティーナ・グラムリヒ＝オカ、上智大学国際教養学部教授



報告書表紙

【報告】71～81頁

「欧米における国学研究の過去から未来へ—研究史と津軽国学の紹介」藤原義天恩、レスブリッジ大学文学部准教授（カナダ）

【コメント・総合討議】83～87頁

コメンテーター

林淳（愛知学院大学教授）

一戸渉（慶應義塾大学准教授）

桐原健真（金城学院大学教授）

※報告者ほか所属は本書刊行当時のもの

本書の編集は、「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」（2018～2020年度）のメンバーが行った。

冒頭では、フォーラムの前提となった当研究所でのこれまでの国学研究事業の紹介及び、「国学」研究の経緯（本学に於ける諸事業や国学研究の概要）、日本社会における「国学」の認識や国内での国学研究の進展、また同課題や本フォーラムに期待される成果などが松本氏によって示された。特に課題のうち、客観的な分析のため、他文化を背景に持つ外国人の目から近世国学を捉え直す意義と期待が提示されている。

こうした視座を踏まえ、あるいは海外に於ける「国学」研究の事例をテーマとして、続けて前記した5名のパネリストによる報告（当日の発表内容を報告原稿として改めて整えたもの）が載せられる。さらに発表に対する当日のコメントやリプライ、総合討議の内容が整理・掲載されている。

本報告書の刊行により、そもそも「国学」とは何かという問いかけを始めて、「国学」をめぐる議論や諸問題に関して新たな気づきもたらされることを期待したい。

（吉永博彰）